

パレスティナから出土したヘレニズム・ローマ時代のフタ —特に身との関係から—

牧野 久実

Associated Lids and Vessels from the Hellenistic and Roman Periods in Palestine

Kumi MAKINO

パレスティナ考古学研究においてかつてフタが主要なテーマとなったことはない。しかし、ユダヤ民族の口伝律法を収集したミシュナには器の内容物を穢れから守るとしてフタの重要性が記されている。今回は共伴事例をもとに、フタの型式分類とその変遷について身との関係性も含めながら概観する。

研究の結果、身の器種毎に異なるフタが使用されたこと、似た形状でも身との関係によって機能や意味が異なること、身とフタの区別に関する幾つかの指標などが明らかになった。また、前期ローマ時代を境にフタの機能が内部の漏出防止から外部からの浸入防止へと変化したことやユダとガリラヤ地域における特殊性も示された。

キーワード：フタ、パレスティナ考古学、ミシュナ

Lids have not been a research focus in the archaeology of Palestine. However, *Mishna*, the oral Torah compiled in the 2nd century in Palestine, indicates that lids were important in protecting the contents of vessels from contamination.

This paper focuses on the typology and changes in lids (also covers and stoppers) through the analysis of associated examples found from the Hellenistic to Roman Periods in Palestine. The results indicate a change in the relationship between lids and their associated vessels. This implies the lids function changed from stopping internal leaks to external intrusion prevention. The shift occurred during the early Roman Period when the Jewish community was decimated in the wars against Romans.

This study describes changes in the significance of lids from a Judaic viewpoint and provides further understanding of Jewish dietary customs and the distinction between clean and unclean.

Key-words: lids, Palestine archaeology, Mishna

I. 研究の目的と方法

筆者はかつて、パレスティナから出土したヘレニズム～ローマ時代のフタの役割や主な種類について整理した(Makino 2015; 牧野 2017)。その際、フタ及びセンを深手、浅手（いずれも英文報告書では Lid と記される）、詰め込み式（英文報告書では Stopper と記される）と分類した。本稿ではこれらと関連して、特にフタと身の関係に着目した分析を行う。

フタと身の関係には、身の口径がフタの口径を上回る①類、フタの口径が身の口径を上回る②類、双方の口径が同じ③類と、大きく3通りある（図1）。本稿ではまず共伴関係が明確なものを中心にしながら両者の形状と関係を整理し、その後単独の出土例について検討を行う。フタと身の関係性に注目する理由は、上記の3タイプが一定の機能

をはたしていると考えられるからである。

我々の身近な生活用具を参考にするならば、①類は鍋、椀、薬味壺、味噌甕、瓶の栓等がある。これらの身の口縁部端部や頸部は外反したり口縁部内側に段を設けるなど、フタの受部としての工夫が施されている。一方、フタの口縁部端部は受部を邪魔せずに身と合致するようシンプルな形状である。鍋や椀の内容物である熱い液体から立ち上る蒸気は、フタの天井部内側を伝って外部に漏れ出ることなく再び器の中に落ちる。一方、外部からの埃などはフタと器の境目に生じる窪みを通じて器の中に混入する可能性がある。つまり、①類は外部からの混入よりも内容物の漏出を防ぐことを重視した形状と言える。

②類の身近な例としては茶器、特に来客用の特別な茶器がある。フタには身とのズレを防ぐための工夫、例えばフ

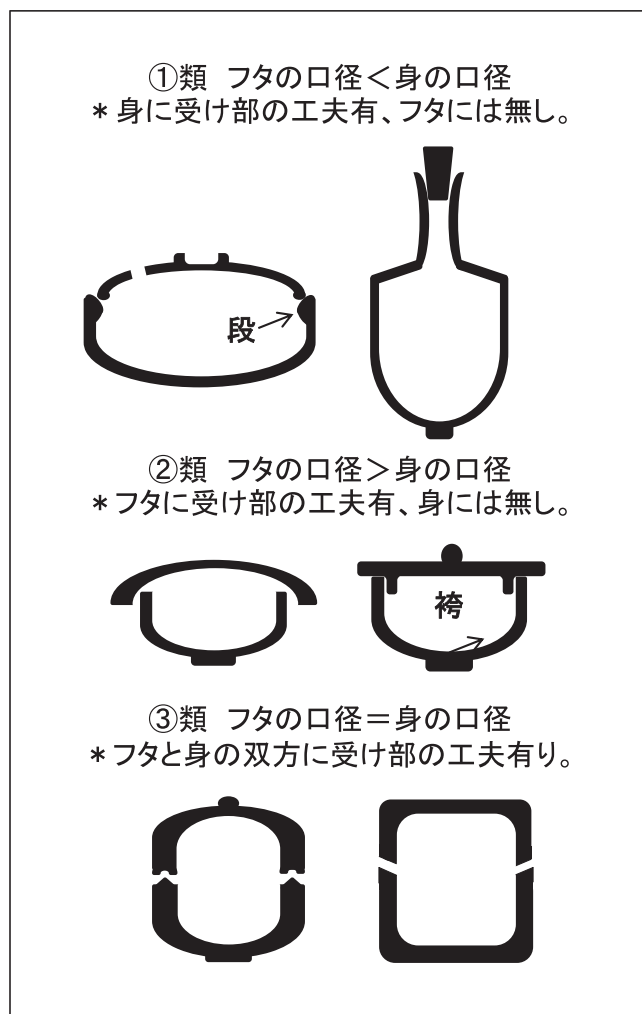


図1 フタと身の関係

タの口縁部内側の袴が施され、身の口縁部端部はフタの袴を邪魔しないシンプルな仕上げである。茶器の場合、内容物は鍋同様に熱い液体であるが、フタの口径が身を上回るため外部からの混入物は無い。客をもてなす茶器には内容物を清く保つことが最優先される。つまり、②類は、①類とは逆に、外部からの混入を許さない形状と言える。

③類の身近な例としては菓子器、骨壺等がある。フタ天井部にツマミが有るものと無いものがあり、開閉の際には掌全体でフタを掴めるようフタの直径は最大でも掌程度である。フタと身が隙間なく合わさる合子で、フタと身双方の口縁部に互いの受け部となる工夫が施される。また、②類同様にフタ口縁部内側の袴によって身とのズレを防ぐ工夫が施される場合もある。③類は開閉の機会を最小限に留めて空気その他を遮断する場合に適した形状と言える。

以上のように、フタと身の関係は機能と結びついており単なるデザイン性ではない。②類の鍋や碗や①類の客用茶器が見られないように、フタの形状が同じであっても身との関係が異なればその機能や意味も異なる。①～③類の違

いは器の内容物と外部の接触状況、即ち浄不浄の概念と結びつくと考えられる。

なお、本稿で扱った出土物とその時代については刊行された発掘報告書によるものである(表1、図2)。考古資料としてのフタについては、出土した際や整理段階においてそれと認識されないものや未公開のもの、またフタではなく鉢や皿として分類されるものも多く存在するようだ。従って、本稿において参照した遺跡の中にはフタの出土が報告されていない場合もあるが(表1のミハル、ケイヤファ、ヒズマ、ワジ・エッ・デリイエ、ベト・ズル)、出土の有無について考慮すべき点があるのか、もしくは分布しないということに意味があるのか、引き続き検討する余地があるという意味でこれらの図表に含めた。

時代区分は、ヘレニズム時代が前期(紀元前4世紀後半～)と後期(紀元前2世紀半ば～)に分けられるが、区分が明確でない場合には一括してヘレニズム時代と区別される。また、しばしば判別が難しいとされる前期ヘレニズム時代はペルシア時代末と一括して報告される場合がある。ローマ時代は共和制ローマのグナエウス・ポンペイウス・マグヌス(Gnaeus Pompeius Magnus)がハスモン朝ユダヤのイェルサレムに対して攻囲戦を行った紀元前63年からビザンチン時代が始まる紀元330年までで、このうちローマ軍指揮官のティトゥス・フラヴィウス・ヴェスパシアヌス(Titus Flavius Vespasianus)率いるローマ軍によってイェルサレムが攻囲された紀元70年までが前期、シモン・バル・コクバ(英語表記では Simon Bar Kokhba)を中心としたユダヤ民族による2度目の対ローマ戦争が勃発した135年までとその後のユダヤ教の復興が試みられた200年までが中期、その後が後期である。これらは政治史による時代区分であるため、物質文化のそれとはズレが生じる場合がある。また、本稿で取り扱う遺跡は現在のイスラエル国を中心としながらより広い範囲に立地するものも含むため、対象地域を表す用語としてパレスティナ(Palestine)を使用する。

II. フタと身の関係性～主に共伴事例から

(1) 深手のフタ(表2-1、表3-1)

深手のフタは口径が約15～18cmで、高さは口径とはほぼ同じか口径がやや上回る。口縁部は垂直に、または僅かに外反もしくは内湾しながら下がり、口縁部端部は丸みを帯びている。胴部は丸みを帯びるが、中程に僅かな屈曲部を有する場合もある。丸みを帯びた天井部には小さく突き出た、もしくは低いツマミがあり、上下を逆にすると小鉢もしくは碗に見える。

共伴事例はいずれも②類である。早期の例としてはテベから出土した交易用貯蔵壺があり(Amiran 1969: 141,

表1 本稿で参照した遺跡とその時代区分

遺跡名(個体数)	時代	PER末～EH	LH	ER	MR	本稿で用いた発掘報告書
1 アナファ(41/1186)		HELL2C(98-75BCE)		ROM1A(end of 1 st BCE)	ROM1B(early 1 st CE)	Herbert 1997
2 エン・ゲヴ(1/971)		III	II	I		月本他 2009, 牧野 2011, 杉本他 2016
3 セフォリス(39/545)			LH	ER1(1-70CE), ER2(70-135CE)	MR(135-300CE)	Meyers & Meyers 2013
4 アポロニア(2/119)		late 4 th to mid 2 nd /1 st BCE				Roll and Tal 1999
5 ミハル(0/54)		V	IV	II		Herzog et al. 1989
6 ゼロール(1/263)		V	IV-I	ROM		大島他 1966-70
7 ドル		IVB(Ptolemaic)	IVA(Seleucid)	III(HEL-ROM)	ROM	Stern 1995
8 サマリヤ(1/552)		IV LH(2 nd -107BCE)	ROM	1&1a (1BCE-Early 1CE) 2a(late 1CE- 2CE) 3a(3rd CE) 4a(early 4th CE)		Reisner et al. 1924 Crowfoot et al. 1957
9 シェケム		IV(325-250)	IIIB, A	II I (150-110)		Lapp 2008
10 ケイヤファ(0/107)		III				Garfinkel & Ganor 2009
11 ヒズマ(0/61)		Cave1(1CE)				Magen 2002
12 イェリコ(6/555)		HS1(100-95/85BCE), HS2(85/75-31BCE), HR1(31-15BCE), HR2(15BCE-6CE)		HR3(6-48CE), (48/70-135CE)		Bar-Nathan 2002
13 イェルサレム(12/818) 但し2003年報告まで		X2-St.7	X2-St.6-4	A-St.6-4(1BCE&1CE)		Gava 2003, 2006
14 ヘロディウム(2/157)		Phase 1(37BCE-48CE)		Phase II(48-70CE)		Porat et al. 2015
15 ワジ・エッ・テリイェ (0/100)		Cave I 主にPer末			Cave II 主にER/MR	Lapp & Lapp 1974
16 ゲゼル(5/431)		EH St III(mid 3 rd BCE) St IIC(-mid 2 nd BCE)	LH St IIB(mid 2 nd BCE) St IIA(early 1 st BCE)	ER St I(late 1 st - 3 rd CE)		Gitin 1990
17 ベト・ズル(0/249)		St III(一部 PER末-EH)	St II(175-165BCE) St I(140-100BCE)			Sellers et al. 1968
18 クムラン		Phase B-D (early 1BCE-31BCE)				Magen & Peleg 2007
19 マレシヤ(4/176)		3 rd /2 nd BCE				Kloner 2003
20 マサダ(60/764)		Hasmonean	EHB & MHBP(31-15BCE) LHBP(15BCE-6CE)	Garrison(6-48 & 48-115CE)		Bar-Nathan 2006
21 ビニヤネイ・ハウマ (26/648)		Iron末-EH (late 8-early6BCE)	Late HEL(Has) to Early ROM(Hero) (mid 1BCE-70CE: Phase1-4)		ROM (-3CE末)	Arubas & Goldfus 2005

*PER: ペルシア時代、 H:ヘレニズム時代 (EH:前期、 LH : 後期)、 R:ローマ時代 (ER : 前期、MR:後期、 LR : 後期)。

*時代区分とその名称は報告書の記載に従った。個体数は各報告書に記載された上記時代の土着土器片数とフタの数である。例えば2/100は全体100点中2点がフタである。また、数値の記載の無いものは作業中であるがフタの出土を確認している。なお、報告書未入手のものや未刊行のものもあるため、これらの数値は暫定的なものである。

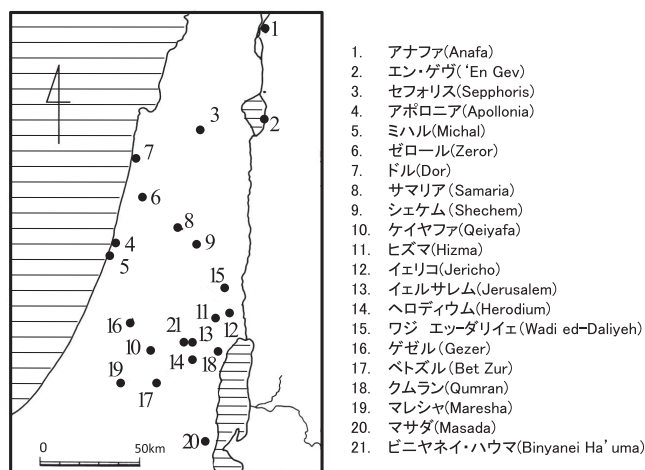


図2 本稿で参照した遺跡

Photo 131)、フタの封泥によるとエジプト第18王朝の王への献上品である油をカナンから輸出したものであった。深手のフタが身の頸部全体をびたりと覆っている。

パレスティナにおける深手のフタの出土例はローマ時代に増加する(牧野 2017: 90, 図2)。紀元1世紀初頭、即ち前期ローマ時代のクムラン(Qumran)では、羊皮紙を保管する壺のフタとの共伴例が多数知られている(Pfann 2002: 164, Figure 11.1)。壺に文書を保管する習慣についてはヘレニズム時代のエジプト、デイル・エル・メディネ遺跡(Deir el-Medineh)でも見られ、同様の共伴例が報告されている(Pfann 2002: 168, Figure 11.4)。

クムランから出土した文書壺の胴部は細長いまたはやや丸みを帯びたシリンダー状で、全体の高さは約45~70 cm、口径(外径)は15 cmを中心に14~18 cmである。肩部に小さな把手が4つ付くものは紐を通してフタを固定したとされる。身の頸部は、僅かに内湾または外反する場合もあるが、大半は小さな肩部からほぼ直立する。頸部の高さは身全体の大きさに関わらず共通して約2.5 cmで、口縁部端部は丸みを帯びる。

共伴するフタは鉢状で、身の頸部をすっぽりと覆う。即ちフタと身の関係は②類に相当する。フタ全体の高さは5~12 cmと多様であるのに対し、口径は外径で約19~23 cm、内径で16~20 cmとほぼ同じである。中には口径が高さを大きく上回り、もはや深手と呼べないものもある。また、しばしば胴部中程に屈曲部分を有する。丸みを帯びた天井部のツマミは小さく突き出たものから低いものまである。これらは、主にツマミの形状によってディスク状(Types 1-9)、小さなボタンまたは円錐状(Types 10-15)、リング状(Types 16-23)と大きく3分類(23細分類)されており(Baillet et al. 1962: 13-15)、深手のフタの多様性を示している。

その一方で注目すべき共通性は、フタの胴部中程から口縁部にかけてほぼ垂直に、または僅かに外反もしくは内湾しながら約3~5 cmと一定の長さで下がる点、そして口縁部端部が丸みを帯びる点である。これに対応するように、身の頸部は全体の大きさに関わらずいずれも約2.5 cm垂直に立ち上がる。こうした共通性は身の頸部を隙間なく覆うに適した形状であり、深手のフタを小鉢や碗と見分けるための基準になりえる。なお、フタ単体としてはエルサレム(Jerusalem)(Geva 2003: Plate 5.10-29, 30)、ゲゼル(Gezer)(Gitin 1990: Plate 33-24)、マサダ(Masada)(Bar-Nathan 2006: 92, Plate 15, 109-116)、ベト・ズル(Beth-Zur)(Sellers et al. 1968: 71, Figure 21-20)等でも報告されており、中には既述のように鉢として報告されているものも少なくない。上記の共通点を基準としながらこれらを見直す必要がある。

パレスティナ北部ではガリラヤ(Galilee)地域においては中期ローマ時代(135-300 CE)のセフォリス(Sephoris)遺跡からクムランと良く似た、しかし異なる特徴を持つ深手のフタが複数出土している(Meyers and Meyers 2013: 106, Plate 25, 1-6)。高さ約10 cm、口径約16 cmで、胴部中程から口縁部に向かって約2 cmほぼ垂直に下降する点はクムランの事例と共通する。しかし、中央に窪みのある小さな臍状のツマミや、全体の形状がほぼ均一である点はクムランとは異なる。また、報告書の図には反映されていないがしばしば口縁部付近に焼成前に穿たれた小さな孔があり、報告者は身と紐で固定するためのものと解釈している(Meyers and Meyers 2013: 52)。フタの口縁部に孔を穿った事例はこれ以外に報告されていない。なお、小さな臍状のツマミが付く同様のフタについては後期ローマ時代になるとエルサレムでも見られるようになる(Geva 2006: 191, Plate 7.2)。

セフォリスから出土したこれらのフタは、胎土の共通性からシヒン・ジャー(Shikhin jar)に用いられたという説がある(Meyers and Meyers 2013: 38)。シヒン・ジャーは、胎土分析によってセフォリス近郊のシヒンで生産されたことが判明しており(Adan-Bayewitz and Perlman 1990: Figure 3-2; Adan-Bayewitz and Wieder 1992: 196, Figure 5-2)、ハマット・ティベリア(Hamat Tiberia)、ティベリア(Tiberia)、カペナウム(Capernaum)、ホルヴァット・ハズン(Horvat Hazon)、メイロン(Meiron)、ナブラタイン(Nabratein)、スシータ(Susita)、ガムラ(Gamla)、エン・ナシュト('En Nashut)、ダビエ(Dabiyyeh)と、同時代のパレスティナ北部地域で広く用いられた。細長い胴部と長い頸部、僅かに外反する口縁部を有し、頸部を除いた全体に波状の畝が横方向に入る。又、肩部には一対の把手が付く(Meyers and Meyers 2013: 91, Plate 17, 92)。

表2 フタと身の関係性～主に共伴事例から

*縮尺は不統一

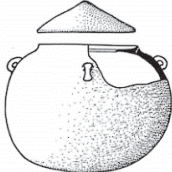
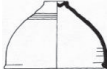
1 深手のフタ		2 浅手のフタ		3 詰め込み式のフタ	
②類	ディスク状のツمامミ	③類	 クムラン出土 (ER) Baillet et al. 1962, p.23, Figure 4-3, 19. 貯蔵壺との共伴図番は Pfann 2002, p.164, Figure 11.1, Q28-2, Shrine2.	③類	マッシュルーム状  マサダ (ER) Bar-Nathan 2006, p.220, Figure 70. 壺との共伴事例多数有
	ボタン状のツمامミ		 ゲゼル出土 (PER) Stern 1982, p.101, Figure 133.  マサダ出土 (ER) Bar-Nathan 2006, p.181, Plate 31-80, 81.		楔状  セフォリス出土 (ER) Meyers and Meyers 2013, p.79, Plate 11-9.
	リング状のツمامミ		 クムラン出土 (ER) Baillet et al. 1962, p.23, Figure 4-17, 貯蔵壺との共伴図番は Pfann 2002, p.164, Figure 11.1, Q12-2		ディスク状  マサダ (ER) Bar-Nathan 2006 p.224, Plate 37-25 アンフォラと共伴の可能性
	②類? ヘソ状のツمامミ		 マサダ (ER) Bar-Nathan 2006 p.187, Plate 32-18, 19.  マサダ (ER) 同上 20, 21.		①類? ディスク状  マサダ (ER) Bar-Nathan 2006 p.224, Plate 37-25 アンフォラと共伴の可能性
②類?	ヘソ状のツمامミ	②類	 セフォリス出土 (MR) Meyers and Meyers 2013, p.107, Plate 25-1 シヒン・ジャーと共伴の可能性	②類又は③類	駒状  セフォリス出土 (MR) Meyers and Meyers 2013, p.107, Plate 25-8. 水差しと共伴の可能性
					貯蔵壺との共伴例は テル・メガディム出土 (PER) Stern 1982, p.112, Figure 157.

Plate 18)。

セフォリス遺跡において同じ遺構 (L1068 及び L1179) から出土したシヒン・ジャーと深手のフタの関係を図面から検討してみると、フタはシヒン・ジャーの頸部を緩やかに覆い、肩部の把手が固定部となる。一方で、口縁部上部がフタの内壁と接触することは決してなく、身の頸部全体を覆う形となっている。即ち、身との関係は②類に相当する。フタと身の頸部がぴったり合致するクムランの共伴例とは少し様子が異なるが、今後検討の余地がある仮説と言えよう。

(2) 浅手のフタ (表2-2、表3-2)

浅手のフタは全体に扁平な三角形状で天井部に小さなツمامミを持つ。口縁部端部は丸みを帯び、内湾するものや外

反するもの、内面に僅かな返りを有するものがある。これらはヘレニズム～ローマ時代のキャセロール (時にフライパンとして報告されている) との共伴事例がしばしば報告されており、フタ単独の出土も多い。

浅手のフタとの最初の共伴例はペルシア時代のゲゼルで出土した4つのループハンドル付きの無頸のクッキング・ポットとされる (Stern 1982: 101, 133)。フタの胴部は僅かに丸みを帯び、口径は身の口径とほぼ同じである。丸みを帯びた口縁部端部は受け部となる身の口縁部内側の僅かな窪みにうまく収まる。フタと身の関係は③類、即ち合子に相当する。共伴はしていないものの、同時代 (但し、ヘレニズム時代のフィルから出土) のサマリア (Crowfoot et al. 1957: 133, Figure 12a-4) や前期ヘレニズム時代のゲゼル (Gitin 1990: Plate 35.9) などでも同様のフタと身が

表3 フタと身の関係性の変遷
(出土事例については代表例を記した。)

	H	ER	MR	LR
1 深手のフタ	ディスク状のツマミ パト・スル(PER-EH) イエルサレム(LH) イェリコ クムラン他(ER) ボタン状のツマミ クムラン イエルサレム マサダ(ER) リング状のツマミ ゲゼル(EH) クムラン(ER) イェリコ(ER) セフォリス(LR) ヘソ状のツマミ セフォリス(MR)のみ イエルサレム(LR) へそ状のツマミ以外は共伴事例より②類			
2 浅手のフタ	クッキング・ポットと共伴 ゲゼル(PER) クッキング・パンと共伴 マサダ(ER) 共伴事例及び身の形状より③類 逆八の字に外反する口縁部を有し、 ループ状の把手の上面が口縁部上 面を僅かに上回るキャセロール 身の形状から①類? 主に垂直(水平含む)に伸びる把手 (フタを固定?)マサダ(ER) 水平に伸びる把手(フタを固定?) セフォリス(MR及びLR) 共伴事例及び身の形 状より②類及び③類 身の形状より②類			
3 詰め込み式のフタ	マッシュルーム状 ドル(H) アホロニア(H-ER) マサダ(ER) 楔状 ドル(H) イェリコ(ER) イエルサレム(ER) ヘロディウム(ER) セフォリス(ER) 共伴事例から③類 ディスク状 マサダ(ER) イエルサレム(ER) アンフォラと共 伴ならば①類 駒状 テル・マガディム(PER) マレジャ(H) ハウマ(ER) セフォリス(ER-MR) 共伴事例等から②類又は③類			

出土している。

一方、キャセロールはアテネでは前6世紀から、前5世紀後半以後には東地中海の島々や沿岸地域で一般的となり、パレスティナでは前3世紀頃、即ちヘレニズム時代に広く用いられるようになった。パレスティナではローマ時代になるまで共伴例が知られていないが、それ以前の身の頸部にはフタの受け部としての工夫が明確に見られる。後期ヘレニズム時代では大きく2タイプある。1つは逆ハの字に大きく外反し口縁部端部に窪みや刻み目が無いタイプで、フタの受け部として適当である。このタイプには口縁部から胴部中程にかけてループ状の一对の把手が縦方向につくが、把手の上面は口縁部上面を僅かに上回る。例えば、イエルサレム (Geva 2003: 157, Plate 5.1-30: 171, Plate 5.8-37; Geva 2006: 133, Plate 4.8-12)、マレシャ (Kloner 2003: 93, Figure 6.6-77)、アナファ (Herbert 1997: Plate 28-PW229, Plate 29-PW241) といった事例にみることができる。これらの特徴は、フタとの関係において①類に相当するだろう。なお、これらは前期ローマ時代まで継続する。もう1つは、サマリアやゲゼルからの出土例に見られるように、頸部が無く、胴部から口縁部にかけて外反し、口縁部端部内側にフタの受け部となるような窪みが見られるものである。これらの特徴は①類または③類の可能性を示す。

前期ローマ時代ではマサダから3点の共伴事例が報告されている (Bar-Nathan 2006: 187, Plate 32)。いずれもキャセロール (またはフライパン) で、身の形状はそれ以前と異なり平底から胴部が垂直に立ち上がり無頸である。フタは全体に扁平な三角形状をした浅手で、口径約20cm前後、高さ5cm前後、天井部に直径約1cmの小さな孔を穿ったツマミを持つ。フタの口縁部端部は外面が僅かに外反する。これらのうち2点は口縁部に一对の把手が縦方向に付く。把手はフタを固定する役割を果たしており、フタが身を覆う際身の口縁部端部はフタの内側に収まるよう僅かに内湾している (同上: 18と19, 20と21)。フタと身の関係は②類に相当する。

他の1点 (同上: 181, Plate 31. 80と81) はフタと身の口径が同じで③類に相当する。身の把手は口縁部やや下に水平に付き、合子のフタを邪魔しない。こうした特徴は上記の2点と異なる。フタの口縁部端部には小さな刻み目が施されており、僅かに内湾する身の口縁部を受け部として適当な形状である。

これらの共伴例からもわかる通り、前期ローマ時代にはヘレニズム時代以来の伝統に加えて②類が新たに加わる。そして、フタの多くはヘレニズム時代とは異なり、天井部から胴部にかけての形状が緩やかな山形を描き、ディスク状または臍状のツマミを有する。これらは共伴事例が示す

ように②類、または③類として身を覆うに適した形状と言える。一方、前期ローマ時代の身単体としてはヒズマ (Hizma) 遺跡 (Magen 2002: 55, Figure 2.57-1, 2) 等でもマサダの共伴例に類似したタイプが出現する。

中期ローマ時代以後になると無頸が主流となり、把手はその上部が口縁部を大きく上回るものは見られず、水平に取りつくもの、または胴部中程から口縁部にかけて取りつくが、その上部は口縁上部を上回らないものに限定される。水平に取りつく把手はあたかもフタを②類として受けるかのように、中程が少し窪んでいる。さらに、後期ローマ時代になると把手は水平に取りつくもののみとなる。

以上のように、浅手のフタはフタ単体の出土例を一見すると、クッキング・ポット用とされたフタを除けば、ヘレニズム時代には末広りの浅い山形が中心であったが、前期ローマ時代にはやや膨らみのある山形が混在するようになり、やがて後期には山形が主流になるという変遷を追うことができる。しかし、このことを身との関係から考慮すると、ヘレニズム時代には①類、過渡期である前期ローマ時代には①～③類が混在し、その後中期及び後期ローマ時代には②類へと変化する。フタそのものの形状の変化はこうした身との関係の変化に対応した形状だったと言える。

(3) 詰め込み式 (表2-3) (表3-3)

考古資料としては粘土を丸めたボール状 (アボロニア; Roll and Tal 1999: 247, Figure 5.15-19、マサダ; Bar-Nathan 2006: 224, Plate 37. 31-37等) に相当するが、器の口に詰め込むフタとしてはこの他に楔状 (セフォリス; Meyers and Meyers 2013: 79, Plate 11.9、マサダ; Bar-Nathan 2006: 224, Plate 37.42-44)、駒状 (セフォリス; Meyers and Meyers 2013: 107, Plate 25.7-14)、ディスク状 (マサダ; Bar-Nathan 2006: 223, Plates 36.1-14, 37.1-29) がある。

考古資料としては遅くとも後期青銅器時代には知られており、粘土を丸めて乾燥させただけという単純な形状であるため、報告書に記されない場合も多い。ローマ時代になるとユダ地域においてボールに軸のついたマッシュルームのようなタイプが一般的となる。紀元1世紀後半のマサダでは貯蔵壺の口を塞いだ共伴例が見つかった (Bar-Nathan 2006: 220, Figure 70)。また、報告書に掲載された図と写真からは軸状の部分が明確に示されていないが、クムランでも同様の共伴例が報告されている (Magen and Peleg: 16, Plate 1-1: 46, Plate 47)。

マサダの事例によると、マッシュルームの軸に当たるフタ下部が壺の口を封じ、傘にあたるフタ上部が身との固定部になっている。身との関係は③類に相当する。同遺跡では単体の事例も複数報告されており、それらは傘の直径が7~14cm、軸の直径が6~8.3cmで全体の高さは8~12cm

である。(Bar-Nathan 2006: 224, Plate 37, 31-37)。マッシュルーム形のフタは紀元前10～9世紀の下ガリラヤ、ホルヴァット・ロシュ・サイトで穀物用の貯蔵壺のフタ (Gal 1989: 281-283, Figure 1) が見つかったことから、ガリラヤ地域からユダ地域に広がったと解釈されている (Bar-Nathan 2006: 216)。なお、地中海沿岸部のアポロニアではヘレニズム時代～前期ローマ時代で傘の部分やや扁平なタイプが見つかった (Roll and Tal 1999: 247, Figure 5.15-19)。

楔状のフタは文字通り楔形で、中ほどの突起部が身との固定部になる。小指の先ほどの小さなものは発掘中に見逃される場合も少なくない。こうした中、前期ローマ時代末 (70-135 CE) のセフォリスでは小水差との共伴例が報告されている (Meyers and Meyers 2013: 79, Plate 11.9)。また、土器の他、石製のウンゲントリウムとの共伴例がイエリコで報告されている (Bar-Nathan 2002: 167, I11-107)。身の高さは3.5～6 cmで厚めの平底とシリンダー状の細長い胴部、端部を丸めたシンプルな口縁部を有する。胴部下がやや膨らむ少し変わった形のこの小瓶はJ-UN3に分類され、用途不明だがユダ地域で紀元1世紀のユダ地域に限定して出現するとされる。フタは中程のディスク状部分が身との固定部で、下部は身への詰め込み部、上部がツマミである。フタと身の関係は③類に相当する。石製の単体はイェルサレム (Mazar 1971: 18-19, Figure 12: 18) で、土器のフタ単体はマサダ (Bar-Nathan 2006: 224, Plate 37, 42-44) やヘロディウム (Bar-Nathan 1981: 67, 124, I11. 95: 2, Plate 8. 9) で報告されており、時代はいずれも紀元1世紀である。

ディスク状のフタは特に共伴例は見られないものの、その直径からアンフォラ・ストッパーと呼ばれ、特に同じ出土地点においてドレッセル (Dressel) 2-4タイプ (Bezeczky 1998: 228) とランボグリア (Lamboglia) 2タイプ (Bezeczky 1998: 232) が多数出土していることから、ワインやオリーブ油用アンフォラのフタと考えられている (Bar-Nathan 2006: 214, 217)。詰め込み式ではあるが、実際には身に載せるだけの形状であり開閉が容易である。

紀元1世紀のマサダからの出土例によると、厚手と薄手があり、厚手は厚さ2.3～4 cm、直径8～10 cmの円盤状で上部中央にノブ状のツマミとその周囲には浮彫の文様が施される (Bar-Nathan 2006: 223-4, Plate 37, 1-25)。シリカ質微粉末を含む粘土を低温で焼成したもので、脆く文様の細部は明確でない。ヘレニズム時代のサマリア (Reisner et al. 1924: Vol. 1 387; Vol. 2, Plate 68 c) や前1世紀初めのイェルサレム (Geva 2003: 181, 242-243, Plate 6.3: 35) でも出土している。薄手は厚さ2～3 cm、直径8.3～12 cmで、同様に上部中央にノブ状のツマミが付く (Bar-

Nathan 2006: 223-224, Plate 37, 26-29)。ただし浮彫などの文様は無い。

ディスク状のフタそのものに身との固定部は無い。従って、②類や③類でないことは明らかである。フタとの固定部は身の側に施され、仮に身をアンフォラとするならば、その頸部はフタの直径よりも小さく、身の口縁部はフタの受け部となるようフタの直径を上回るだろう。

駒状のフタは口縁部やや内側に、身との固定部である明確な袴を有する。早くはペルシア時代のテル・メガディムで貯蔵壺との共伴例が知られる (Stern 1982: 112, 157)。残念ながら当該資料については計測値の無い写真でしか確認できていない。しかし、身は肩部にループ状の把手が一对付いた尖底の無頸壺で、口縁部端部が僅かに外反している。フタの胴部断面は扁平な三角形状で、幅と高さが胴部の約半分と比較的大きめのツマミを天井部に有する。フタの口縁部やや内側に巡る突帯が身との固定部となり、フタと身の関係は②類または③類に相当する。

駒状のフタ単体としてはヘレニズム時代のマレシャで1点出土している。高さ4.5 cm、口径9.5 cmで、口縁部やや内側に低い袴を、また天井部に明確なツマミを有する (Kloner 2003: 89, Figure 6.4-62)。類似の断片は前期ローマ時代のビニヤネイ・ハウマでも報告されている (Arubas and Goldfus 2005: 119, Figure 7-7)。また、前期～中期ローマ時代のセフォリスから複数出土している (Meyers and Meyers 2013: 107, Plate 25.7-14)。特に中期 (135-300 CE) のものは長めの袴を有する。胴部断面は扁平な三角形状で、高さ3.5～4.5 cm、口径約8～9 cm、天井部に直径1～1.5 cmの筒状のツマミが付く。ツマミには小さな孔が穿たれているものがあるが (Meyers and Meyers 2013: 8, 12, 14)、少なくとも実測図からは破損ではなく予め穿たれたように見える。

口縁部内側の袴は高さ0.5～1 cm、外径約5 cmで下方にやや内傾している。報告者はおそらく壺か水差しのフタとしており、この頃のガリラヤ地域を代表する壺であるシヒン・ジャーがこれに相当すると想定される。セフォリス遺跡において同じ出土地点 (L1068 及び L1179) からの出土物を検討したところ、シヒン・ジャーとフタの口径は確かにほぼ同じであり、図面上では一見うまく組み合わせるように見える。しかし、袴の位置を考慮すると実際には身との間に隙間が生じ、身の頸部との整合性が無い (図2-b)。他方、報告者がSJ3bと分類する片手の水差し (Meyers and Meyers 2013: 99, Plate 21. 10-13) は、口縁の外径が7.5～8.5 cm、最も狭い箇所での内径が約5 cm、外反する口縁部と共に③類の関係において駒状のフタと合致するように見える (図2-c)。

シヒン・ジャー同様にSJ3bの水差しも近郊のシヒンで

生産された可能性が高いという (Meyers and Meyers 2013: 44)。ミシュナが編纂された時期にガリラヤの拠点であるシヒンにおいて特定のフタが生産され、それが、現時点では仮説の域を出ないが、特定の容器用として生産されていた可能性は、今後注目すべき課題であろう。

なお、同じくセフォリスからの出土物だが、やや時代がさかのぼる前期～中期ローマ時代のものは袴が短く、もはや駒状とは言えないほどである。類似の胴部を有するが、天井部のツマミは小さなボタン状で、短い袴が口縁部やや内側に付く (Meyers and Meyers 2013: 107, Plate 25.15-16)。うち1点はツマミに孔が穿たれている。口縁部端部の僅かな刻み目ややや内側に傾斜した低い袴は、壺や水差しの口を③類として塞ぐための工夫であろう。

Ⅲ. 分析結果のまとめ

3種のフタそれぞれの型式とその変遷について述べてきた結果、以下の点が明らかになった。

第一に、共伴事例によると、身の器種によって異なるフタが用いられたことが明らかである。このことから、フタは身とは無関係に製造・使用した、あるいは一部で指摘されたように (Guz-Zilberstein 1995: 302; Tal 2006: 273, Figure 11) 身の大小に合わせて使ったのではなく、身の形状や用途を考慮したうえで適切な形状として作られたと考えられる。身の受け口、そして恐らくは把手の形状も含めてフタを固定するための工夫が施されていた可能性がある。このことは、しばしば困難とされる身とフタの区別についても幾つかのヒントを与えてくれる。深手においては胴部中程から口縁部にかけてほぼ垂直に一定の長さで下がること、浅手については頂部に孔が穿たれていることがそうした指標として指摘できる。また、身の把手の形状も重要である。共伴事例の分析によると、身の把手は必ずしも持ち手としてではなく、フタを固定する機能を持つ。こうした点に注目しながら、これまで鉢や皿として分類された考古資料をあらためて見直す必要があるだろう。

第二に、フタと身の関係性について一定の時代的傾向が認められる点である。前期ローマ時代に顕著となる深手は明確な②類である。浅手のフタは前期ローマ時代を境に①類及び③類から②類へ変化し、詰め込み式のフタについても中期ローマ時代以後まで継続するものも含めて①類ではない。こうした点は、フタが増加すると同時に、漏出防止から浸入防止へと機能的変化を遂げたことを意味するのではないだろうか。

このことの背景として留意すべき点は、パレスティナのユダヤ社会がヘレニズム時代以後ギリシア・ローマ化したこと、さらに紀元1～2世紀に勃発した2度の対ローマ戦争によって壊滅的な打撃を受けたことが挙げられる。その

後、ユダヤ教の指導者たちは宗教的拠点であったユダ地域を逃れ、北部、特にガリラヤを拠点としてユダヤ社会の復興を図った。180～210年にはベト・シェアリム、その後はセフォリス、さらにティベリアと中心を変えながらユダヤ社会のアイデンティティ強化が推進された。こうした歴史的画期とフタに関する考古学的現象の関連性は、本研究で明らかにされた点である。

こうした中、中期ローマ時代のセフォリス遺跡から極めて特殊な形状のフタが出土している点は注目に値する。明確な共伴例が少ないため詳細は今後の調査の進展を待たなければならないが、特に、セフォリスの土器を製造した可能性が指摘されているシヒン遺跡の窯跡との関連性は注目する必要がある。すでに記したビニヤネイ・ハウマヤクムランのほかに、ユダ地域においてはギヴァット・ハミヴタル (Giv't Hamivtar) やギヴァット・ラム (Givat Ram) が、また下ガリラヤのクファル・ハナニヤ (Kfar Hananya)、そしてさらにガムラ付近のエル・ジュメイザ ('el-Jumeizah) においても窯が発見されており、いずれも近隣で使用する調理器などが焼成されていたことが明らかになりつつある。

Ⅳ. ミシュナが伝えるフタの意味

筆者は前稿において庶民生活を律するための指針として紀元2世紀末までに成立したユダヤ民族の口伝律法集、ミシュナ (Mišna) の記述を参照しながらパレスティナから出土したヘレニズム～ローマ時代のフタの役割や主な種類について整理した (表4) (牧野 2017: 94, 表4に追記)。ミシュナは穢れを5段階に分類している (清潔の巻 トホロート篇 1-5 他)。穢れとの接触によって人は穢れ、その原因には飲食も含まれる。従って、器には細心の注意を払う必要がある。この意味において、器の形状はとりわけ重要である。「木製器と皮製器、骨製器とガラス器は、平らなら淨い。しかし容器状ならば、穢れうる。」 (清潔の巻 ケリーム篇 2-1) (三好 1997: 5; 原文は Library of the Hungarian Academy of Sciences 2008: fol. 223r, 右下から 10-4 行目) (「容器状」は原文で「受け入れうるもの」 (מקבליהן)) や、平らな形状や壊れて使えないものは「内部がない」ために清い (אין לו תוך בכלי חרס) (清潔の巻 ケリーム篇 2-3) (原文は Library of the Hungarian Academy of Sciences 2008: fol. 223r, 左下から 7 行目) という記述は、容積を有する器の形状が淨と同時に不淨を受け入れるという性質を含んでいることがわかる。

ミシュナがフタの重要性に言及している理由は、容器が持つこうした致命的な欠点を補う工夫であるためだろう。例えば「以下の器は、しっかり締まった覆い蓋によって (同じ天幕下の死体の穢れから容器内のものを) 防御する

表4 ミシュナに見られる主なフタ

	ミシュナにおける例文	(和訳内のヘブライ語はコデックスA50に従い筆者が追記)
מגופת (ムグファ)	・「壺の栓(מגופת החבית)が緩んだか、(まだ)離れ落ちない場合・・・」(清潔の巻 ケリーム篇 10-3) (三好 27) (fol.227r 左3-4行目) ・「(その窯が)覆い蓋で締められている場合・・・それら(釜の銅底に見つかった針か或いは輪)が壺の栓(מגופת החבית)の中に見出される場合・・・」(清潔の巻 ケリーム篇9-1) (三好 23) (fol.226v 右8-9行目:なお、この文中では覆い蓋(צמיד פתיל)と併記されているので、両者を異なるものとして見分けていたことが明らかである) ・「壺の栓(מגופת החבית)は、(壺とは)連結されていると見なされない。」(清潔の巻 ケリーム篇3-6) (三好 9) (fol.224r右5行目:原文では3-7。なお、メコンムレでは定冠詞が脱落(מגופת חבית)している。) ・「・・・水を両手に注いではならない場合とは、・・・壺の栓(מגופת החבית)からもいけない。」(清潔の巻 ヤダイム篇 1-2) (三好 312) (fol.282r 右下から数えて5-4行目) ・「彼は孔のあいた壺の栓(מגופת החבית)についても(以下のように)言ったであろう・・・」(清潔の巻 ケリーム篇 9-8) (三好 25) (fol.226v 右下から数えて4-3行目)	
כסוי (キスイ)	・「すべての覆い(כל הכסויות)は、湯沸かし器のもの以外は、清い。」(清潔の巻 ケリーム篇14-3) (三好 37) (fol.229r 左17-18行目) ・「手箱の覆い(כסוי)は穢れうる。たんすの覆い(כסוי)は清い。・・・」(清潔の巻 ケリーム篇 16-7) (三好 42) (fol.230v 右1-2行目:原文では16-8である。また、手箱の表記(קפצה)の最後がアレフになっている。また、メコンムレではユッドがいずれも2つ) ・「ぶどう酒甕や油甕の覆い(כסוי)と、パピルス壺の覆い(כסוי חבית)は穢れを受けえない。しかし、もしそれらを(容れ物としての)用途に応用するならば、それらは穢れを受けうるものとなる。シチュウ鍋(לפס)の覆い(כסוי)は、それに孔があいていて、(先が)尖っている限り、穢れを受けえない。もしそれに孔があいていないで、(先が)尖っていないならば、穢れを受けうる。なぜならば、彼女は、その中に野菜(の水分)を濾すことができるからである。」(清潔の巻 ケリーム篇2-5) (三好 6) (fol.223v 右2-3行目:メコン、ムレでは「パピルス壺の覆い」の表記が原文と異なる(כסוי חביות)。なお、通常壺のフタはツアミード・パティルで表記されるが、ここではキスイとなっている。冒頭よりキスイの記述が連続するためだろうか。) ・「・・・こね鉢の破片はそれで水差しの口に蓋をするため(לכסות)、ガラスの破片はそれで瓶の口に蓋をするため(לכסות)・・・」(祭日の巻 シャバット篇 17-5) (長窪・石川 70) (fol.48v 左6-7行目)	
צמיד פתיל (ツミッド・パティル)	・「以下の器は、しっかり締めまった覆い蓋(צמיד פתיל)によって防御するものである。」(清潔の巻 ケリーム篇10-1) (三好 27) (fol.227r 右14行目) ・「何によって、それらを(しっかり)締め回すのか。石灰で、ギブスで、泥で、ワックスで、粘土で、人糞で、モルタルで、土器粉で、そして粘着用になるすべてのもので・・・。締め回すことにならないのは、錫によっても、鉛によっても。その理由は、それは覆う(פתיל)ことはできるが、しかし、しっかり締める蓋(צמיד)にはならないからである。」(清潔の巻 ケリーム篇 10-2) (三好 27) (fol.227r 右末行) ・「食料や飲料、そして(栓が)開いた土器。しかし、寝台や椅子、そして完全に栓がしてある(צמיד פתיל)土器は、清い。」(清潔の巻 トホロート篇 7-5、7-6) (三好 222-223) (fol.264r 左16-17行目、及び下から数えて3-2行目:和文およびメコンムレの7-6は原文では7-7である。)	

- (1) 原文は10世紀もしくは11世紀と現存する最古の写本とされるカウフマン・コデックスA50 (Library of the Hungarian Academy of Sciences 2008) のデジタル写本を用いた。引用文後の括弧内 (fol.) はfolium の略語で、この文書が2つ折りになっていることを意味する。
- (2) 表中のヘブライ語表記は原文に掲載されたものである。
- (3) 原文にはページ数が無いため、デジタル写本上の数字を写本のページ数として記した (例えばfol. 227r)。
- (4) 写本では篇が変わる部分を除き章や節の番号が文中に並んで記されている。このため、指定行数は筆者が数えたものである。
- (5) 和訳は既存のものから引用したが、カウフマン・コデックスA50の記載との相違点については、必要に応じてマイモニデス版 (Mechon Mamre 2002) も用いながら追記した。
- (6) ヘブライ語のカナ表記法は日本ユダヤ学会ヘブライ語カナ表記委員会による統一見解 (日本ユダヤ学会 2007) に従った。

ものである—糞製の器、石製の器、(焼いた)土器、そして明礬製の容器、魚骨製の、そしてその皮の、海にいる動物の骨の、およびその皮からの容器、また、木製の(常に)清い器—これらは、(しっかり締まった覆い蓋が)これらの容器の口にあろうと、これらの側面にあろうと、これらの底に座っていようと、これらの側面にもたれていようと、(同じ天幕下の死体の穢れから、器内のものを)防御する。・・」(清潔の巻 ケリーム篇 10-1) (三好 1997: 27; 原文は Library of the Hungarian Academy of Sciences 2008: fol. 227r 右上より 13 行目—右下より 6 行目まで) が示すように、フタが容器の内容物を穢れから遮断する重要な役割を果たしており単なる身の付属物ではなくユダヤの穢れ観と密接に関連する宗教的な道具そのものであることがわかる (Makino 2015; 牧野 2017)。なお、この点に注目した研究としては石器との関連性について論じたものがある (Magen 2002)。

ミシュナにおいてはハヴィート (ḥabit)、即ち壺に被せるフタがムグファと呼ばれている。考古資料に見られる壺用の深手のフタはこれに相当するだろう (牧野 2017: 95-96)。また、キスイはシチュウ鍋 (原文でラパス: lapas) と共に用いられている。キスイは「覆いかぶせるもの」という意味で、調理器としてのキスイはギリシア語起源のレパス (lepas)、即ち平らな貝のような形状の鍋、即ち考古資料としてのキャセロールに用いられた (牧野 2017: 94-95)。さらに、石灰や粘土などを丸めて容器の口に詰め、「覆うだけでなくしっかりと締める」ためのフタをツァミド・パティル (šamid paṭil) と呼んでいる。考古資料として知られる粘土をボール状に丸めたフタはツァミド・パティルそのものであり、このことはすでに一部で指摘されている (Bar-Nathan 2006: 216; Magen 2002: 138-139)。

なお、聖書にキスイ、ムグファ、ツァミド・パティルの語を検索したところ (Bible Hub 2007-2018)、フタとして用いられた箇所はツァミド・パティルの 1 か所 (民数記 19 章 15 節)「ふた (צמיד פתיל) をしていない口のあいた器もみな、汚れる」のみであった。キスイは動詞カサー (כָּסָה: 覆う) に由来し、聖書の 152 か所において天や (創世記 7 章 9 節) 地 (出エジプト記 8 章 6 節)、身体 (創世記 24 章 65 節) や顔 (出エジプト記 10 章 5 節)、またカスーイ (覆うもの) として 2 か所 (民数記 4 章 6 節および 14 節) と散見されるが、これらのうち器のフタとして記載されたものは 1 点も無い。さらに、ムグファについては記載事例を見つけることができなかった。参考までに追記しておく。

今回の分析対象は未だ限定的だが、これをたたき台としてフタの型式分類と編年の構築に向けて今後より詳細な分析を重ねていく。

なお、本研究は文部科学省科学研究費助成事業・基盤研究 (A) 研究課題名「ユダヤ・イスラーム宗教共同体の起源と特性に関する文明史的研究」(課題番号 25257008、研究代表者 市川裕) 及び基盤 (A) (海外学術調査)「イスラエル国ガリラヤ地方の新出土シナゴグ資料にもとづく一神教の宗教史再構築」(課題番号 17H01640、研究代表者 市川裕) の助成によって行った。

参考文献

- Arubas, B and H. Goldfus (eds.) 2005 *Excavations of the Site of the Jerusalem International Convention Center (Binyanei Ha'uma)*. Journal of Roman Archaeology Supplement Series 60. Ann Arbor, Cushing-Malloy.
- Adan-Bayewitz, D. 1993 *Common Pottery in Roman Galilee: A Study of Local Trade*. Bar-Ilan Studies in Near Eastern Languages and Culture. Ramat-Gan, Bar-Ilan University Press.
- Adan-Bayewitz, D. and I. Perlman 1990 The Local Trade of Sepphoris in the Roman Period. *Israel Exploration Journal* 40: 153-172.
- Adan-Bayewitz, D. and M. Wieder 1992 Ceramics from Roman Galilee: A Comparison of Several Techniques for Fabric Characterization. *Journal of Field Archaeology* 19: 189-205.
- Amiran, R. 1969 *Ancient Pottery of the Holy Land. From Its Beginnings in Neolithic Period to the End of the Iron Age*. Jerusalem and Ramat-Gan, Massada Press.
- Baillet, M., J. T. Milik and R. De Vaux 1962 *Les 'petites grottes' de Qumran. Discoveries in the Judaean Desert of Jordan III*. Oxford, Clarendon Press.
- Bar-Nathan, R. 1981 Pottery and Stone Vessels of the Herodian Period. In E. Netzer (ed.), *Greater Herodium*, 54-70. Qedem 13. Jerusalem, The Institute of Archaeology, The Hebrew University of Jerusalem.
- Bar-Nathan, R. 2002 *Hasmonian and Herodian Palaces at Jericho. Final Reports of the 1973-1987 Excavations. Volume III: The Pottery*. Jerusalem, Israel Exploration Society.
- Bar-Nathan, R. 2006 *Masada VII. The Yigal Yadin Excavations 1963-1965 Final Reports. The Pottery of Masada*. Jerusalem, Israel Exploration Society.
- Berlin, A. M. 1997 The Plain Ware. ix-246. In S. C. Herbert (ed.), *Tel Anafa II, i*. Ann Arbor, Kelsey Museum of the University of Michigan.
- Bezczeky, T. 1998 Amphora Types of Magdalensberg. *Arheološki vestnik* 49: 225-242.
- Bible Hub 2004-17 *Bible Hub* (in English and Hebrew). <https://biblehub.com/>. (2018 年 11 月 26 日閲覧)
- Crowfoot, J. W., G. M. Crowfoot and K. M. Kenyon (eds.) 1957 *The Objects from Samaria*. London, Palestine Exploration Fund.
- Finsy, D. A. and J. R. Strange (eds.) 2015 *Galilee in the Late Second Temple and Mishnaic Periods Vol. 1 and 2*. Minneapolis, Fortress Press.
- Fisher, M. 1989 Hellenistic Pottery (Strata V-III). In Z. Herzog, O. Negbi, and G. Rapp Jr. (eds.), *Excavations at Tel Michal*, 177-187. Minneapolis and Tel Aviv, The University of Minnesota Press and The Sonia and Marco Nadler Institute of Archaeology, Tel Aviv University.
- Gal, Z. 1989 Loom Weights or Jar Stoppers? *Israel Exploration Journal* 39: 281-283.
- Garfinkel, Y. and S. Ganor (eds.) 2009 *Khirbet Qeiyafa Vol. 1. Excavation Report 2007-2008*. Jerusalem, Israel Exploration Society.

- Geva, H. (ed.) 2003 *Jewish Quarter Excavations in the Old City of Jerusalem. Vol. II. The Finds from Areas A, W and X-2*. Jerusalem, Israel Exploration Society.
- Geva, H. (ed.) 2006 *Jewish Quarter Excavations in the Old City of Jerusalem. Vol. III. Area E and Other Studies. Final Report*. Jerusalem, Israel Exploration Society.
- Gitin, S. 1990 *Gezer III: A Ceramic Typology of the Late Iron II, Persian and Hellenistic Periods at Tell Gezer-Data Base and Plates*. Jerusalem, Hebrew Union College.
- Guz-Zilberstein, B. 1995 The Typology of the Hellenistic Coarse Ware and Selected Loci of the Hellenistic and Roman Periods. In A. Belfer-Cohen et al. (eds.), *The Excavations at Dor, Final Report Volume IB. Areas A and C: The Finds*, 289-434. Qedem Reports 2. Jerusalem, The Institute of Archaeology, and The Hebrew University of Jerusalem in cooperation with The Israel Exploration Society.
- Herbert, S. C. (ed.) 1997 *Tel Anafa II, i*. Michigan, Kelsey Museum of the University of Michigan.
- Herzog, Z., G. Rapp, Jr. and O. Negbi (eds.) 1989 *Excavations at Tel Michal*. Minneapolis and Tel Aviv, The University of Minnesota Press and The Sonia and Marco Nadler Institute of Archaeology, Tel Aviv University.
- Johnson, B. L. 2006 The Hellenistic to Early Islamic Period Pottery. In A. Mazar (ed.), *Excavation at Tel Beth-Shean 1989-1996. Publication Volume 1. From the Late Bronze Age IIB to the Medieval Period*, 523-589. Jerusalem, Israel Exploration Society, The Hebrew University of Jerusalem, The Institute of Archaeology.
- Kline, M. 2005 *Shisha Sidre Mishnah* (in Hebrew). <http://chaver.com/hebrew/%20index.html>. (2013年10月10日閲覧)
- Kloner, A. 2003 *Maresha Excavations Final Report I. Subterranean Complexes 21, 44, 70*. Jerusalem, Israel Antiquities Authority.
- Lapp, N. 2008 *Shechem IV: The Persian-Hellenistic Pottery of Shechem/Tell Balatah*. Boston, Massachusetts, American Schools of Oriental Research.
- Lapp, P. W. and N. L. Lapp (eds.) 1974 *Discoveries in the Wadi ed-Daliyeh*. Cambridge, Massachusetts, American Schools of Oriental Research.
- Library of the Hungarian Academy of Sciences 2008 *Mishnah MSA50, Italy, Late 11th-mid-12th c. David Kaufmann and His Medieval Hebrew Manuscripts in the Oriental Collection of the Library of the Hungarian Academy of Science* (in Hebrew with English title). <http://kaufmann.mtak.hu/en/ms50/ms50-coll1.htm>. (2018年11月20日閲覧)
- Magen, Y. 2002 *The Stone Vessel Industry in the Second Temple Period*. Jerusalem, Israel Exploration Society and Staff Officer of Archaeology.
- Magen, Y. and Y. Peleg (eds.) 2007 *The Qumran Excavation 1993-2004, Preliminary Report*. Jerusalem, Staff Officer of Archaeology, Civil Administration of Judea and Samaria.
- Makino, K. 2015 *Lids and the Jewish Dietary Purification in Ancient Palestine*. Poster presented at the XXI World Congress of the International Association for the History of Religions. Erfurt, Germany.
- Mazar, B. 1971 The Excavations in the Old City of Jerusalem Near the Temple Mount-Second Preliminary Report, 1969-1970 Seasons. *Eretz Israel* 10: 1-34. (in Hebrew)
- Mechon Mamre 2002 *Shisha Sidre Mishnah* (in Hebrew). <http://mechon-mamre.org/b/h/h0.htm>. (2013年10月10日閲覧)
- Meyers, M. and C. L. Meyers (eds.) 2013 *Sepphoris I: The Pottery from Ancient Sepphoris*. Winona Lake, Eisenbrauns.
- Porat, P., R. Chachy and Y. Kalman (eds.) 2015 *Herodium: Final Reports of the 1972-2010 Excavations Directed by Ehud Netzer, Volume I, Herod's Tomb Precinct*. Jerusalem, Israel Exploration Society.
- Pfann, S. J. 2002 Kelei Dema': TITHE Jars, Scroll Jars and Cookie Jars. In G. J. Brooke and P. R. Davies (eds.), *Copper Scroll Studies*. Journal for the Study of the Pseudepigrapha Supplement Series 40. 163-179. New York, Sheffield Academic Press.
- Roll, I. and O. Tal (eds.) 1999 *Apollonia-Arsuf. Final Report of the Excavations Vol.1*. Tel Aviv, Tel Aviv University.
- Sellers, O. R. et al. 1968 *The 1957 Excavation at Beth-Zur*. Cambridge, Massachusetts, American Schools of Oriental Research.
- Singer-Avitz, L. 1989 Local Pottery of the Persian Period (Strata XI-VI). In Z. Herzog et al. (eds.), *Excavations at Tel Michal. Israel*, 115-44. Minneapolis and Tel Aviv, The University of Minnesota Press and The Sonia and Marco Nadler Institute of Archaeology, Tel Aviv University.
- Stern, E. 1982 *Material Culture of the Land of the Bible in the Persian Period 538-332 B.C.* Jerusalem, Israel Exploration Society.
- Stern, E. 1995 *Excavations at Dor, Final Report, Volume IB; Areas A and C: The Finds*. Jerusalem, The Institute of Archaeology, The Hebrew University of Jerusalem in cooperation with the Israel Exploration Society.
- Tal, O. 2006 *The Archaeology of Hellenistic Palestine: Between Tradition and Renewal*. Jerusalem, The Bialik Institute, Jerusalem. (in Hebrew)
- 石川耕一郎 (訳) 1987『ミシュナ ペサヒーム』エルサレム文庫。
- 石川耕一郎・三好 迪 (訳) 2003『ミシュナ I ゼライーム』教文館。
- 杉本智俊・間舎裕生 (編) 2016『イスラエル国エン・ゲヴ遺跡 2009年度~2011年度調査報告』慶應義塾大学西アジア考古学発掘調査団。
- 月本昭男・長谷川修一・小野塚拓造 (編) 2009『エン・ゲヴ遺跡』リトン。
- 長窪専三・石川耕一郎 (訳) 2005『ミシュナ II モエード』教文館。
- 西アジア文化遺跡発掘調査団・大島 清 (編) 1966-70『テル・ゼロール：西アジア文化遺跡発掘調査団報告書』全3冊 日本オリエント学会。
- 日本ユダヤ学会 2007『ヘブライ語カナ表記委員会 2008年1月ヘブライ語カナ表記方法とその用例答申』<http://www.waseda.jp/assoc-jsjs/hyouki.html>. (2015年11月17日閲覧)
- 牧野久実 2011「エン・ゲヴ遺跡出土のヘレニズム土器—2009年度再発掘H地区資料を中心に—」『オリエント』54巻1号 158-181頁。
- 牧野久実 2017「ヘレニズム・ローマ時代のフターパレスティナからの出土例について—」『西アジア考古学』18号 89-98頁。
- 三好 迪 (翻訳・監修) 1997『タルムード 6 トホロートの巻』三貴。

牧野 久実

鎌倉女子大学教育学部

Kumi MAKINO

Faculty of Education, Kamakura Women's University